

平成 22 年 5 月 25 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2009

課題番号：19730498

研究課題名（和文） ロシア帝国ムスリム地域における教育改革運動：
「新方式」教育の思想と実践研究課題名（英文） Educational reform movement for the Muslims of the Russian Empire:
Ismail Bey Gasprinskii and the “New Method”

研究代表者

渡辺 賢一郎（WATANABE KENICHIRO）

東洋大学・人間科学総合研究所・客員研究員

研究者番号：30328637

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、ロシア帝国のムスリムによってなされた教育改革運動に注目し、「新方式」を創始した代表的ムスリム知識人イスマイル・ベイ・ガスプリンスキー（ガスプラル、1851-1914）の思想および実践を、各種史料から明らかにすることである。特に、高等教育機関メドレセに関して、(a)従来の教育方法に対する現状認識と批判、(b)「新方式」の教育理念、(c)カリキュラムおよび指導方法の改革、(d)学生生活の改革、(e)他の学校との競合関係、について実証的に解明し、それらを総合的に考察することを課題とする。研究課題に実証的に接近するため、まず関係資料の所蔵機関に出張して、資料調査・収集をすすめた。(a)ガスプリンスキーによって発行された定期刊行物、(b)ロシアのムスリム地域で発行されたその他の定期刊行物、(c)ガスプリンスキーの著作、(d)帝政ロシア政府による公文書、(e)ロシア・ムスリム地域に関する各種統計資料、である。コピー複写、写真撮影などにより収集し、一部については解説・基礎データの入力等を行った。収集資料を分析し課題の解明をすすめた結果、(a)高等教育機関メドレセの改革には旧来の方式からの非常な抵抗があり、そのために慎重な準備をしなければならなかったこと、(b)彼らの教育改革の目的として民族の進歩という観念があったこと、(c)カリキュラム改革によって短期間でありながら一定の高い教育効果を目指したこと、(d)アラビア語やイスラームに関わる科目以外の世俗科目の充実化をはかり、現実のユーラシア情勢に対応すべき人間形成を目指したこと、(e)寄宿舍の整備を行い学生生活の規律化および食生活改善をはかったこと、(f)どの学校であってもロシア・ムスリムの学ぶ重要性に変わりはないとして、ロシア政府を刺激しないように競合する他の教育機関も評価したこと、等を明らかにした。以上の作業から、ガスプリンスキーによる教育改革は、過度にイデオロギー的なものではなく、現実的に改革をすすめるための戦略が慎重にとられ、このため一定の成果をあげたことを確認した。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study is to examine the educational reform movement for the Muslims of the Russian Empire, especially the Medrese reformation by the Crimean Tatar Intellectual Ismail Bey Gasprinskii(1851-1914) who introduced the new method of education for Russian Turks. The points of this study are to analyze (a) how did Gasprinskii and other reformers grasped and analyzed the current situation about the “Old Method” education, (b)what was the educational philosophy of the “New Method” for them, (c)how did they improved the curriculum, teaching method and (d) student life, (e)how did they considered the other schools administered by Russians. For these purposes, this study project research by field trip and get the relevant documents: periodicals published by Gasprinskii and others, their works, public records of Russian Government and various statistics. As a result of investigation of these documents, this study project illustrate as follows. (a)It was necessary for Gasprinskii and other reformers to arrange the Medrese reform cautiously because of antagonism by the “Old Method”. (b) The basic

philosophy of the “New Method was derived from “progress” of their Russian Muslims. (c)They aimed the elevated educational effects unless the restrictive curriculum. (d)They valued not the Arabic language and Islamic traditional subjects but secular and pragmatism subjects in order to tackle the real-life of Russian Muslims in crisis. (e)The boarding houses were adjusted in accordance with the “New Method” so that student kept their mind on studying. (f)Gasprinskii and others also made a valuation for other schools by Russians or Muslims because of a real strategy or their pragmatism philosophy. Therefore, it seems reasonable to conclude that the educational reform movement by the “New Method” was not excessively ideological movement which previous studies advocated but moderate and effective movement that reformers aimed the tactical and pragmatism solution.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,600,000	0	1,600,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度	0	0	0
年度	0	0	0
総計	2,900,000	390,000	3,290,000

研究分野：教育史

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：教育史、ロシア史、イスラーム史、社会運動史、メディア史、帝国史、母語教育、思想史

1. 研究開始当初の背景

ソ連邦解体後、中央ユーラシアの地政学が注目されているが、そこで特に大きな比重を占めるのが旧ソ連やロシア帝国の支配下にあったイスラーム教徒（ムスリム）である。彼らは今後、いかなる社会構築の方向性を模索するのだろうか。欧米的な「民主主義」を基盤とした社会構築か、あるいはイスラームに社会構築の基盤をおくのか、その議論の方向性そのものが今後の中央ユーラシアの地政を左右するだろう。このような議論の中で彼らムスリムが参照するのは、19世紀後半に彼らの先達たちが抱えていた同様の問題群である。ロシア帝国は、ロシア語教育とロシア正教への改宗を二本柱とした同化政策を、ムスリムなどの被支配民族に行った。一方、「進歩」などの西洋近代の価値観が、出版物などを媒体として流入された。また、イスラーム本来の価値観も注目された。彼らは、あるべき社会の方向性をめぐって議論し、様々な模索を行った。

社会構築をめぐる方向性の差異が、思想・実践ともに最も顕在化するのが、児童・青少年に対する「教育」という場である。本研究計画は、19世紀後半から20世紀初頭にか

て、ロシア帝国のムスリムによってなされた教育改革運動の分析を目的とする。特に、ムスリム伝統の教育方法を批判して創められた「新方式」といわれる新しい学校について、教育思想および実践の両面から分析する。具体的には、「新方式」を創始した代表的ムスリム知識人イスマイル・ベイ・ガスプリンスキー（ガスプラル、1851-1914）の思想および実践を、各種史料から明らかにする。

2. 研究の目的

研究代表者はこれまで、ガスプリンスキーについて文章語改革運動の実践者という側面から研究を行ってきた。そこで明らかにした、ガスプリンスキーの文章語改革のねらいは、母語習得、および母語を用いた世俗科目の学習を重視するというものだった。そして、そのねらいを達成するために、児童による母語の習得を容易ならしめるよう、平易な字母の創出など、改革運動に着手したのである。すなわち、ロシアによる同化政策に対抗する人材育成が主目的であって、その戦略的手段として文章語改革が位置づけられたのである。このようなガスプリンスキーらによってなされた社会改革運動にとって、「新方式」

を基幹とした教育改革の思想および学校現場における教育実践の位置づけは極めて大きい。またこの運動がロシア帝国内にとどまらず、バルカン半島、小アジア、イラン、インド、中国新疆に至る、中央ユーラシアの広大な地域に影響を与えたことを考慮すれば、その思想や運動を実践面から支えた学校教育を明らかにする意義は極めて大きいと言えるだろう。本研究は、これまでの研究代表者による研究経過、および近年の研究動向を踏まえ、これを上記の視点から発展させることで、帝政期ロシアのムスリム地域における社会改革運動を、教育改革運動の思想および実践という面から分析することを目的とする。

3. 研究の方法

「新方式」を基軸としたムスリムによる教育改革運動について、高等教育機関メドレセをめぐりガスプリンスキーの教育思想ならびに実践を、次の(a)から(e)の視点からそれぞれ明らかにする。

(a)従来の教育方法、いわゆる「旧方式」がいかなる教育をおこなっていたのか、まず確認し、それに対してガスプリンスキーはそうした現状をいかに認識し、さらにどの点を批判したのか、史料から明らかにする。

(b)翻って、ガスプリンスキーが目指す「新方式」の教育の基本的な理念は何なのか、教育の意義をどのように理解していたのか、確認する。

(c)新方式の実践にあたってカリキュラムおよび指導方法をいかに改革しようとしたのか、旧方式と比較しながら整理する。

(d)高等教育機関であるメドレセに付属した寄宿舎はいかに整備されたのか、旧方式と比較しながら整理する。

(e)旧方式の学校はもとより、ロシア政府によって整備された他の学校との競合関係を、ガスプリンスキーら改革派はいかに理解し、それらの対処したのか、明らかにする。

こうした研究課題に実証的に接近するため、まず関係資料の所蔵機関に出張して、資料調査・収集をすすめた。初年度はウクライナおよびトルコ共和国、二年度はロシアおよびフィンランド、最終年度はフランスである。各所蔵機関では、(a)ガスプリンスキーによって発行された定期刊行物『翻訳者』の全紙面の収集、(b)クリミアやカザンなどの地域において発行された定期刊行物、(c)ガスプリンスキーの著作、(d)帝政ロシア政府による公文書、(e)ロシア・ムスリム地域に関する各種統計資料、例えば1897年の第一回国勢調査などである。コピー複写、写真撮影などにより収集し、一部についてはその場で解説し、パソコンへの基礎データの入力等を行った。

これらの資料、および近年リプリントされ

るようになったガスプリンスキー関係の資料、およびロシアやトルコなどで出される研究書を購入することによって、研究課題の解明にあたった。さらに、国内の図書館における調査を通じ、当時のロシア帝国の諸民族の分布やその生活などを確認することで、ガスプリンスキーらの改革運動がめざした方向の実現性の問題について考察した。

4. 研究成果

収集資料を分析し課題の解明をすすめた結果、次の(a)から(f)の視点からそれぞれ明らかにした。

(a)高等教育機関メドレセの改革には旧来の方式からの非常な抵抗があり、クリミア半島のバフチサライ(クリム・ハン国の旧都)にあるジンジリリ・メドレセにおいて先行して実践されていたエフェンディによる改革を評価するにとどめ、自らの改革思想および実践は慎重に準備せねばならなかったことを確認した。

(b)教育改革の目的として、ロシアのムスリム地域がおかれていたユーラシア情勢への危機感がガスプリンスキーらに存在し、こうした危機に対しては民族の進歩が重要であり、そのために教育改革は欠かせないとの観念があったことを明らかにした。

(c)旧方式のメドレセにおけるカリキュラムでは、およそ15~20年間が就学期間となっており、その就学期間そのものが教育成果であると評価されていた。これに対して、教育年数の短縮化および年間計画を整備し、学年分けやクラス分けを行い、適切な教科書を用いた教授法をもって指導し、年一回の試験も導入した。このように短期間でありながら一定の高い教育効果を目指したことを確認した。

(d)アラビア語やイスラームに関わる科目以外の世俗科目の充実化をはかった。基本は母語教育としつつ、諸外国語の学習はもとより、諸科学やものづくりに関わる授業も取り入れた。旧来型の「未知のことばを未知のことばで」学ぶような教育効果のない科目ではなく、前述の危機的なユーラシア情勢に適切に対応することができるような人間形成に不可欠な教科書を重視したことを確認した。

(e)メドレセは高等教育機関であるため、寄宿舎も従来より設置されていた。旧方式では学生生活の監督がなされず、食事や茶などは学生たちがみずから用意していたが、これに対して新方式では寄宿舎の整備を行い、備品類を充実させ、日課を導入し監督者をおくことで学生生活の規律化をはかり、またメドレセ専属の料理人や使用人をおくことで学生たちの負担を軽減し、かつ食生活改善をはかったことを確認した。

(f)ロシアのムスリム地域には、旧方式はも

ちろん、ロシア政府による教育機関も存在したが、こうした競合する他の教育機関もガスプリンスキーらは評価した。これは、こうした学校を批判することでロシア政府を刺激しないようにするという現実的な配慮である一方、どの学校であってもロシア・ムスリムの学ぶ重要性に変わりはないとして、自らが主宰する学校にこだわることなく、教育を奨励したガスプリンスキーの理念に基づく対応であることを明らかにした。

以上の作業から、ガスプリンスキーによる教育改革は、従来の研究史で評価されているような、トルコ民族主義に基づく過度にイデオロギー的なものであったのではなく、ロシアのムスリム地域において現実的に改革をすすめる、彼らが直面した社会問題に対応する人材育成をはかるための慎重かつ現実的な運動であったのであり、このため一定の成果をあげたことを確認した。

本研究の成果報告の一部として、日本中央アジア学会第 12 回まつぎワークショップにおいて、「新方式教育」をめぐるガスプリンスキーの教育改革思想メドレセ改革を中心に」と題する報告を 2010 年 3 月におこなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 1 件)

渡辺賢一郎、「新方式教育」をめぐるガスプリンスキーの教育改革思想 --メドレセ改革を中心に、日本中央アジア学会第 12 回まつぎワークショップ、2010 年 3 月 29 日

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

出願年月日 :

国内外の別 :

取得状況 (計 0 件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

取得年月日 :

国内外の別 :

〔その他〕

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渡辺 賢一郎 (WATANABE KENICHIRO)

研究者番号 : 30328637